

京都教区時報

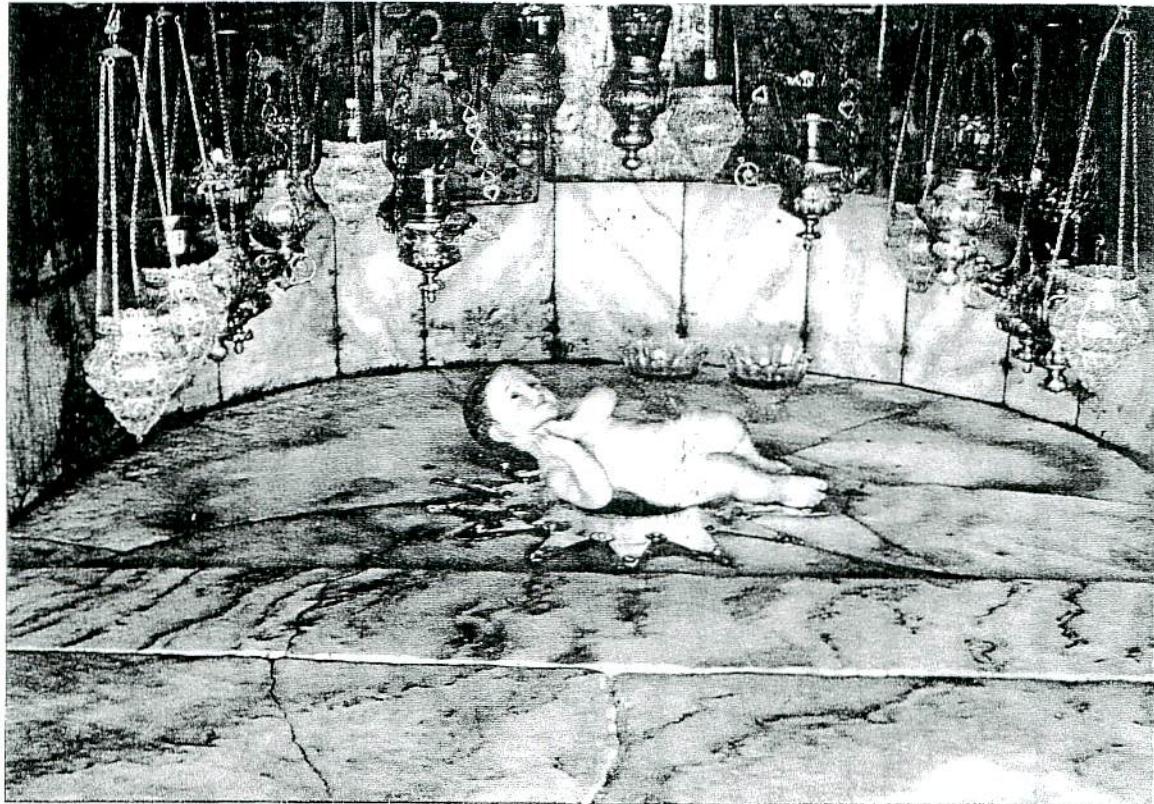
第183号

田中司教認可

毎月1日発行

発行 京都教区 発行責任者 村上透磨

編集 京都教区時報編集室 住所 京都市中京区河原町三条上る河原町カトリック会館5F



私は宿なし着たきり雀
休みを求めて旅をする
私は餌なし裸の子ども
食を求めて軒を回る
私は水なし渴ける小鹿
愛を求めて母鹿を追う
私は傷ついた羽なしかもめ
火矢を恐れて逃げまどう
私は鎖に繋がれた悲しい幼児
窓の光をなつかしむ
私は冷たい働き口ボット
来る日も来る日も同じ仕事
私は光を待つ 解放を待つ
小さな私がうめいている
このかすかな声を聞きとつて
私はやさしいまなざしを
与えてくれる方を待つて
あのベトレヘムからさす光
あのベトレヘムに向かう足音を
御言葉は人となつて
私達は祝う
私達の間に生き給つ
この場所で託身のキリストを
ここは神の御子がはじめて
「地」に触れられたところ

(村上透磨神父)

聖書週間

司教司牧書簡

取りて読め

京都教区長 田中健一

序 取りて読め 取りて読め

これは聖アウグスチヌスが、自

分の罪深い生活を思い、いちじく

の木の下で泣いていた時聞いた、

子どもの声でした。彼は心に電撃

をおぼえました。これこそ答える

のだと。そして彼が聞いた聖書の

箇所が、ロマ書13章12節でした。

これが聖アウグスチヌスの回心の

直接の始まりでした。

聖書は御存知の通り、神のみこ

とばが書かれたものであると言わ

れております。「はじめにみこと

ばがあつた。みことばは神と共に

あつた……。すべてはみことばに

よつてできた。みことばのうちに

いのちがあつた。このいのちは人

間の光であつた……」という言葉

があります。そうです、神のみこ

とばは、いのちであり、光であり、

恵みと真理であります。そしてこ

うの事です。

神のみことばが持つ力、すばらしい恵みをこれ以上によく言い表すことがほかに出来るでしょうか。

聖書が、この神のいのちのみことばを書き表した書物だと言われるのなら、聖書がどれ程重要で、また、私達の生活、私達の生命のはできません。ですから、聖書を大切にしましよう。生命のかてとして大切にしましよう。

1 嬉しい取り組み

さて、この度、聖書週間（11月15日から22日）に向けて、聖書についての司牧書簡を書くようにとの依頼をいただきました。私は司牧者としてこの依頼を、喜んで受けました。

京都教区、特に南部中心ではあります、が、教理センターの企画を継いだ聖書使徒職委員会の方々が聖書講座を、5月から10月頃まで、特に司祭・修道女の方々を講師に、

みなさうにあります。書百週間や聖書深読等をはじめ、教会や家庭における聖書の研究会や分かち合い、またミサの準備のための種々の集い、あるいは講演会・聖書書道展・絵画展などいろいろな試みを通じて、聖書に親しもうとなさっている事も聞いております。

2 聖書を読んでください

にもかかわらず、聖書を自分で読んではいけないというようなお考えをお持ちの方もいらっしゃるかにうかがえます。これはその方々の責任ではなく、自由解釈に対する警戒心とプロテスタンントの方々に対する反発というのでしようか、そんな宗教改革以後の間違つた（と言つてよいと思うのですが）教えによつたものであることを認めねばなりません。

け）

③聖書の中の教えは、私たちに答えを提供する解答集というより、むしろ「問い合わせ」として私たちに迫る神のみことばです。

④信徒はみな、みことばを神様から預かり（預言者）人々に伝達するつとめ（証し・布教）を頂いております。

このみことばは、受けとめるか受けとめないか、どちらでもよいというのではなく、受けとめるこ

毎週水曜（夜）木曜（朝）、過去8回にわたり、毎年テーマを決めて開いてくださいました。今年はナイスに向けて、「聖書と家庭」だけと聞いております。

そこで、今日この手紙を通じ、「取りて読め」というあの言葉を、再び皆様に呼びかけたいと思います。

3 何故聖書を

信仰の源泉は、聖書と聖伝にあると言つて続けてきたのですから。

とによって、私たちが救い、生命を得る、得ないという問題となつてくるのです。それ故、私たちの靈的ないのちに関するみことばを、どうしても受け入れ、聞き入れ、それによつて生かされ、それを証ししなければならないのです。

4 どのように聖書を

聖書の読み方については、すでに聖書講座でも取り上げてくださつておりますし、今回あらためて申し上げませんが、ただその心の姿勢と言つたものを3つほど上げておきたいと思います。

①神のいのちのみことばですから、また恵みですから、まず祈りの心をもつて分かち合うのです。(祈りの中に)

②神のみことばを解き明かしてくださるのは聖霊です。聖霊の助けと照らしを願わねばなりません。(聖霊によりて)

③聖霊は個人にも働きますが、共同体の中によく働きれます。聖霊は祈りのなかに、共同体の分かれ合いの中で豊かに働いて下さいます。(共同体の集いの中で)

ですから、2、3人集まり、聖霊の導きにより、祈りの中に、みことばを読み聞く時、神は私達に

いのちの光を豊かに下さいます。みことばの祭儀の意義は、実はここにあるのです。それ故、「ゴミサの重要性も解つてくるというものです。

結び 神様のラブレター

神のことばは、いのちです。そのいのちのことばを書き記したもののが聖書です。それ故に私たちキリスト者はみな一人残らず、聖書を愛し、聖書に親しみ、聖書を大切にしなければなりません。聖書こそ私たちキリスト者の信仰と命の源泉であるみことばを伝える神様のラブレターであります。

親が子どもに書き送った手紙の中に隠された親のこころを読み取り、何度も読み返すように、神様のこの手紙とも言える聖書を愛し、親しもうではありませんか。

その時もはや、「取りて読め」とのささやきは不要となり、もう誰もが先を争つて取つて読み、神様に出会うことになるでしょう。そんな招きを今日、私もしてみた

「御言葉は貴方のごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことが出来る」。

聖書にみる家庭と私たち

聖書講座参加者の感想文から

第8回聖書講座は、去る10月25日の派遣式をもつて終了いたしました。今回は「聖書にみる家庭と私たち」というテーマでしたが、昼夜合わせて36名の参加がありました。受講者に書いていただいた感想文の中から2篇を紹介いたします。

(聖書使徒職委員会)

講座から学んだこと

鹿野博子

の折この「聖書にみる家庭と私たち」のタイトルの講座があることを知り、「これだ」と思い、早速申込み、参加させて頂いたわけです。

今年の春の復活祭に受洗の恵みに浴することのできました私は、常に、家庭が大きなテーマになっていました。受洗のきっかけも家庭でした。私の目からは、世の多くの家庭が何一つ問題がなく平和な、ましてや教会に集う聖家族のほほえましい姿を見るにつけ、うらやましい限りでした。

一方、私はいつも、口からはグチやつぶやきばかりの毎日でした。受洗後も相変らずの私でした。頭で理解しても、心は罪の繰り返し、家庭の者からも、神から王として迎え入れられたりでした。

た人も、預言者やモーセ、人間的観点からは決して恵まれていなかつたマリアの家庭、いずれも弱く、小さく、罪深い人々だったのです。どの人をとっても何一つ成すのに、自分の力では成し得なかつたのです。いつも神に祈り、悔い改め、最後に神に委ね、神の力により頼む姿を見た時、いつも自分の力により

頼み、しかし成し得ず力んでばかりいた私は、長年ずっと胸につかえていたものがスーと抜けたような解放感を味わいました。今後の信仰生活を送る上でもこの講座が大きな指針となつていくような気がします。

楽しく

身近なものとして

宮地 恒子

聖書講座は随分前から参加したいと願っていましたが、家庭に病人がいたため、外出がままならず、いつも見送つております。今回ようやく機会を得て参加することができました。思つていた以上に面白く、聖書というものをより深く、楽しく身近なものとしてとらえる方法を教えていただいたように思えます。



つてしまふような思いに捕われることが多くあります。

特に旧約聖書は、物語でしか

ないような気がして、全くといつていい程何も知りませんでした。今回、旧約に接する機会を

与えていただき、とても好きになりました。人間というものの弱さ、悲しさ、この世の不条理、何千年も前から、何ら変わるこ

となく人に襲いかかる不幸といふものにはいつもいらだち、何とかそれをくい止めようと

ますが、人間の力では、どうしようもないものの存在がわかつた時、最後に神にすべてをゆだねる勇気を持った時、始めて心の平安が得られることを教えられました。

いつも充実した思いで帰途につくことができたことを感謝いたしております。これからもユニークな角度から聖書を見るこの講座を楽しみにしております。

数年後、人に勧められて参加した京都カトリック教理センター主催の「聖書が好きになる講座」では、直接聖書に触れる事は少なく、その意味に於いて、期待していたものは異なつていました。しかし、毎回かかる講師の神父様方の講話に、同じ信仰を持つ人々の中に、これ程異なる見方、在り方があるのかと、目を開かれ、また、人に話しては危ないぞと思つていた自

私と「聖書」

加瀬 弘子

10年前、半分は義理で仕方なく、聖書研究会に参加しました。戦前からのミッションスクール育ちのカトリック信者の私にとって、聖書は何となく触れたくないもの、苦手なものでした。しかし、このクラスで出会つた聖書は、自分の思い描いていたものとは全く異なり、聖書をもっと知りたい、学びたいという気持を、私の中に芽生えさせてくれました。

こうした読み方を通じて、聖書の中に描かれたキリストの姿を学び、私は、キリストの人としての生きざまに強く惹かれました。弱き者達への眼差し、弟子達との関り、ファリサイ派の人々に対する厳しさ等は、行間に何気なく書かれたキリストの日常の生活の有様と共に、私達に人としての生き方を語りかけておられるように思えます。

そのキリストの姿、「優しさの中の厳しさ」、「弱さの中の強さ」を、現在の課題として、努力し実行できるよう、その原点として、聖書を学び、求めて行きたいと願っています。

(*聖書ニュースからの転載原稿であることをお断りしておきます。)

自分の神様との関り方も、間違いではなかつた事に安堵した私は、「聖書が好き」になりました。

聖書をより深く理解するため書への興味は一層増し、誰でも始めは尻込みする「分かち合い」によって、数人で共に聖書を読む事が、一人では及ばぬ、広く、深い理解に達する助けとなる事を知りました。

ナイズ2・分かち合いのために

聖書と女性

ノートルダム教育女子修道女会

小久保喜以子

旧約時代の女性の地位

旧約聖書の中の女性たちの物語を読むと、古代イスラエルの社会において、女性がいかに低い立場におかれ、男性の所有物として男性に隸属して生きることを強いられていたかを示すものが多く見られます。

アブラハムの妻サラの女奴隸であったハガルの話は、女性が家の存続のために子供、特に男子をもうけることを第一の役割として課せられ、そのための道具として利用されています。アブラハムの甥のロトは、自分の客となつた男性を町の暴徒から守るために、一人の娘を代わりに差しだすとし(創世記19章)、同じように、師士記19章の中のレビ人も、自分が客となつた家が、町のならず者に襲われると、自分の家の主人を守るために、自分の妻(側女)を男たちのほうに押し出してしまいました。

彼女は男たちによって辱められ、殺されてしまい、男性の安全を

守るために女性が利用され、犠牲にされていたことを示す例です。しかもそんな女性に課せられた不当な苦しみは、男性中心に社会の中で、顧みられることがなかつたという印象を受けます。

その上、現代の聖書解釈の中にさ

え、当時のイスラエル人にとって同性愛は非常に忌まわしい罪であつたので、ロトは二つの悪のうち小さい方を選んだのだとして、ロトの行為を弁護しているものがあります。

また女性の役割はもっぱら家中に限られ、女性が外の社会で力を発揮して貢献する道は、ごくわずかの例外を除いてなかつたと言えます。

イエスに従つた女性たち

このようなユダヤ人の社会における女性の状況を考えるなら、福音書に語られているイエスの態度は、極めてユニークなものと言うべきです。ルカによる福音書は、神の国を宣べ伝えながら町や村を巡つて旅を続けるイエスに、何人かの女性たちが従い、仕えていたと報じています(8・1~3)。

イエスに従い、仕えるとは、イエスの弟子であることを意味している。同じルカ福音書のマルタとマリアの話の中で、「マリアは主の足もとに座つて、その話を聞き入つていた」(10・39)とあります。でも、マリアがイエスの弟子である

ことを示すものです。パウロが「ガラチア書の中のパウロの宣言は、それとの同じ表現であり、弟子たちは、ラビの足もとに座つて教えを受けるという習慣があつたようです。

伝統から自由になること

つまりイエスは、家の中に留まること、客をもてなすのが女性の仕事といった伝統から自由になつて、女性をも、男性と同じように弟子として受け入れていたということです。

女性が公の場で奉仕したり、ましてやラビの弟子になるなど考えられないなかつた当時のユダヤ人の社会で、

イエスのとつた態度は、社会の伝統に反し、それを脅かすものだつたといえるでしょう。

ヨハネ福音書4章に語られているイエスとサマリ亞の女の会話も、イエスがどれほど社会の規制に縛られずに、ユダヤ人の敵対するサマリ亞人であり、女性、しかも余り評判の悪いか示しています。

このイエスこそメシアであり、彼によつて神の国が到来したことを信じてきた弟子たちの集まりである教会は、当然女性を偏り見ないイエスの姿勢をうけついだはずです。今

前書11章では、創世記2章の話をもとに、男は女の頭、女が男から出たのであり、女は男のために造られたのだからというひどい言い方をしていました。人のあばら骨から女が造られたという話から、女性の男性への従属を引き出しているのですが、これはパウロの時代の女性に対する見方が創世記の解釈に反映しているのです。

福音の原点にもどる努力を

ところが、同じパウロがコリント

ト教を社会に受け入れるものとして教会の発展をはかるために、イエスのラジカルな精神から離れて、世の価値観、考え方を妥協していつたと思われます。教会がイエスの教えに忠実に歩もうと努力してきたことも事実ですが、同時に、貧しい人に福音を、抑圧されている人に解放をとつて社会の伝統に鬱いをいどんだイエスの精神が、人の思いによつてうすめられたり、ゆがめられたりしてしまつたことも否定できません。

今

く、男と女もありません」というガラチア書の中のパウロの宣言は、そのことを表しています。

NICE-2の話し合いのための手引き

私たちの分かち合いが、NICEそのものです。

NICE（福音宣教推進全国会議）というのは、数年毎に開かれる全国会議のことを言いますが、それぞれの小教区や小グループで分かち合うことがNICEの土台となっています。従ってこの分かち合いこそが、NICEそのものであり、全国会議はその結果にすぎません。



痛みや苦しみや困難を本音で分かち合い、互いに共感し、共有するように努めます。その努力を通して、教会共同体は生まれ、育ちます。のために、次のことに注意しながら分かち合いましょう!!

- 1)分かち合いそのものに意味があります。ですから、話し合った結果をまとめたり、また議事録をとる必要はありません。
- 2)本音の分かち合いをしていただくために、特にプライバシーに関することは、その内容を他言しないで下さい。
- 3)「理想の家庭」にとらわれることなく、また指導したり、評価したりしないで、「あるがままの現実の家庭の姿」を見つめるようにして下さい。
- 4)これから京都教区に於いて、互いの関わりを深め、よりよき宣教共同体になるために、この話し合いを始めています。

第2回 福音宣教推進全国会議 (NICE-2)

宣教司牧評議会報告

9月26日～27日の臨時司牧評議会の概要報告を前号で行いましたので、今回は、5つのグループから出した具体案をまとめたものがあらましを報告する。

一 召命増加のための努力

1 一粒会制度の確立そのPR

2 召命委員会の紹介

3 侍者会の充実

4 司祭の不安解消の手立て

5 信仰の生涯教育(司祭の悪口)をいわない事も含めて)

6 家庭内の学びの必要性

7 社会の影響について

8 他教区の共同司牧の実態調査

9 司祭間、特に教区付司祭間のよりいつその交流を望む

10 受皿として信徒の参加も大切

11 若手司祭元気をなくすような原因を取り除く

二 司祭信徒の自己刷新

1 望ましいのは、公会議後の精神をもつて自己刷新する。そのため勉強会、身近な人々と小グループでの分かち合い。

2 ついて来れない人、教会に来な

* 自分の才能(タレント)を発揮すること。
* 現役員の声を聞くこと。

見し、それを發揮していく
* 自分の祈りを作っていく。
* 信者、未信者と共に呼びかけ
ていくボランティア活動。

い人の対応を大切にする。特に
若者で教会に来ない人は逆方向
に進む危険がある。
* 元・現役員の声を聞くこと。

四 小教区建設・改築・維持費の プール制

1 教区に建築委員会を設立する

(その具体的な人数も)

2 小教区は建物の状況を調査する 体制を作り、教区建築委員会に定期的に報告する。

3 委員会は手をつけるべきものの優先順位をつける。教区長へも報告。ただし現状の配置、規模を維持する事を優先しない。

4 財務・建物については原則として小教区毎に考えるべきであると思うが、小さな小教区では、不可能な事が多いので、小教区委員会、教区委員会を作り協力し合うのがよい。

5 教区賦課金の増額、プール制、特別な行事の企画実行。教会会計の確立を考える。

6 自分の小教区と言う狭い意識から、京都教区信徒と言う意識を増す。そこから例えば資金を教区でまとめる。

7 一万匹蠅運動を全教区的に広めていく。

8隣接する二つの教会が二つを

五 小教区配置の適正化

1 人事面

* 司祭が複数小教区を受け持つ。

* 現在複数司祭の小教区は?

* 教区中央からの司祭派遣。

* 司祭の常駐しない小教区を作

るか、作らないか。

* 司祭の常駐しない小教区の生き

延びる道の提案(信徒の問題)。

* 現状とは変化する小教区の取

り扱い。

* 司祭の人事が一番大きな問題。

これがスムーズに行われるよ

うに期待する。

* 最悪の場合について考える。

* 地域社会の変動を考慮する。

(人口変動、新旧の町の入れかわりなど)

* 教会の必要性は人間が、いき

ている空間として考える必要

* 自然発生も考えられる。

* 教会新設、改修等の動きの調

査、報告による把握。

●信睦二金会百回記念

毎月第二金曜日、西陣教会にお年寄りの方々に集まつていただきて、信睦二金会が開かれ、9月11日、遂に百回目を祝つた。

西陣は河原町につぐ京都では最も古い教会で、ここで若き日の信仰生活を過ごされた方も多く。今司祭館のある古日本家屋は、現在の教会堂がたてられる前、聖堂として親しまれ、多くの人々が家庭的な雰囲気のもとに、戦前戦後を通じて生き続けてきた。

浅田師、西陣に着任後師の発案で、古屋司教様を取り囲んで、毎月1回、ミサと親睦をかねて開かれてちょうど百回を迎えた。

この集まりに、2つの目玉商品（二金会会长加藤正治郎氏談）があつた。

1つは古屋司教様という魅力。2つ目は、西陣教会を中心とする教区の婦人の心のこもった二金亭の弁当である。

古屋司教帰天後、いろんな神父様に来て頂き、ミサを捧げ、親睦を行なっている。

敬老の日は、一年一度の集まり

であるが、ここでは毎月の祝いを行なっている。神の祝福がありますように。

●滋賀ウオーカソン

（11月23日実施予定）

今年もまたウォーカソンの日がきました。私が支援するフリーピンの少数民族ドウマガット族も

ウォーカソンの御援助を頂きました。お陰様で、彼らは台風で倒れた学校を建て直し、濁流に流された農具を買い、しばらくの飢えを

しのぐことができました。

しかしまた心から感動させられたことは、昨年京都ウォーカソンの実行委員のメンバーである青年達でした。

「多くの人に歩いてもらうのに、送り先の現状を知らないのは無責任だ」とドウマガットについての勉強会を開かれたのです。どんなところへどんな援助をするのかを知り、援助がただ金品を渡すだけのものではなく、心と心のつながりであること、お互いの幸せを願う祈りであると、青年達は理解されたのです。

ウォーカソンを年行事の消化に申込み

終わることなく、青年達が「愛は行動から」と遂行された努力、それに協力された参加者の皆様に心から感謝いたしました。

どうぞ今年のウォーカソンも、またこれからもウォーカソンも、キリストと共に歩くものであつてほしいと切望します。

ドウマガット国際教育援助の会

畠山八郎

お知らせ

◆みことばをきこう！

テーマ イエスとは誰か？

— 風かおるガリラヤの地、具体的な歴史の場で生き抜いたイエスを見つめ、紀元2000年日本の地で我等若者いかに生くべきかをさぐる —

時報編集室の村上神父様が入院されております。ご回復をお祈り下さい。

▼編集室から

町 448 京都市上京区河原町今出川梶井
申込み締切 1993年1月9日(土)
TEL 075-231-2017

シスター鈴木 迅
シスター田井

講師 米田彰男神父(ドミニコ会)
日時 1993年1月15日(金)
成人の日 午前9時30分受付
午後4時30分終了

場所 聖ドミニコ女子修道院
対象者 18才以上の未婚の女性
参加費 500円(昼食代)
申込み 左記に記またはハガキでお申込みください。

あなたの良き隣人として
カトリック御葬儀貸物一式(仏式可)
聖ヨゼフ葬典社

パウロ 杉下安雄
(西院教会所属)

京都市右京区西院寿町23
☎ (075)312-7829